

## 明治時代のワイルド劇上演

これまでの研究では明治時代にはワイルドの作品は上演されず、大正元年(1912)11月のアラン・ウィルキー一座の『サロメ』『フローレンスの悲劇』が最初と言われてきたが、芥川龍之介の『サロメ』観劇記の検証の際、あらたな確認ができた。日本における最初のワイルド劇上演は明治28年(1895)7月16日のパブリック・ホールにおけるグレイス・ホーソン劇団の『ウィングミア夫人の扇』、7月22日の『つまらぬ女』であることがわかった。ここではその周辺事情を取り上げておきたい。

### (1) パブリック・ホール、ゲーテ座

ゲーテ座は横浜の外国人居留地にあったことから、Gaiety Theatre あるいは Public Hall と英語名を持つ劇場である。明治3年(1870)にフランス人、ポール＝ピエール・サルダ (Paul-Pierre Sarada, 1844-1905)の設計である。

<sup>(1)</sup> 従って、英語名からもわかるように、「ゲーテ」はドイツの詩人のゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の名からとってものではなく、英語の「陽気、愉快、快活」を表す “gaiety” から由来している。

当初のゲーテ座は手狭であったため、明治18年(1885)にパブリック・ホールが完成した。当初は演劇と音楽の専用ホールが設けられるはずであった。しかし、費用等の諸問題から最終的には多目的ホール一つと集会用の小ホール等の規模となった。その後はパブリック・ホール・アソシエーションは営利目的としてパブリック・ホールを商業劇場として再出発することとなる。

ゲーテ座に関する研究は升本匡彦(1934-)による一連研究、昭和53年(1978)3月の『横浜ゲーテ座 ——明治・大正の西洋劇場』(横浜市教育委員会)、昭和61年(1986)6月の『横浜ゲーテ座 ——明治・大正の西洋劇場』(岩崎博物館出版局、第2版)、昭和62年(1987)10月の『横浜ゲーテ座 ——明治・大正の西洋劇場』(博士論文)により詳細が明らかになっている。升本も指摘しているようにこのゲーテ座については野田宇太郎(1909-1984)、河竹登志

夫（1923-2013）、松本克平（1906-1995）等が適切に評価しているものの、新劇史の中で多くは論じられることがあまりなかった。<sup>(2)</sup>

升本はこのゲーテ座の果たした役割について次のように述べている。

横浜ゲーテ座は、何よりもまず第1に、横浜に住む欧米人のための娯楽施設であり、彼等のパブリック・ホールであった。一方、日本人との関係で考えるならば、この劇場は、新劇史や音楽史（洋学移入史）などにおいてきわめて重要な役割を果たしていたことは明らかである。この意味で、横浜ゲーテ座は、明治・大正期における西洋文化移入の大きな窓であったと言える。<sup>(3)</sup>

ゲーテ座の研究については一連の升本の研究に負うところが大きい。

## （2）グレイス・ホーソン劇団

今回、昭和61年(1986)6月升本匡彦『横浜ゲーテ座』（岩崎博物館、第二版）を再度読み直し、そこで明治28年(1895)7月16日に Grace Hawthorne(1860-1922)の一座の『ウィンダミア夫人の扇』、7月22日の『つまらぬ女』が記録上、日本最初のワイルド劇上演となる。詳細は不明である。今後も調査を継続する。

## （3）ウオリック・メイジャー座

今回、昭和61年(1986)6月升本匡彦『横浜ゲーテ座』（岩崎博物館、第二版）を再度読み直し、そこで明治43年(1910)10月13日にウオリック・メイジャー座(Warwick Major's Comedy Company)によるワイルドの『真面目が肝心』の上演記録があることに気が付いた。これまで何度も見ていた資料であるが、あらためてここで紹介しておきたい。

『横浜ゲーテ座』（1986）には *The Japan Daily Herald* の10月12日に掲載されたバーナード・ショー(George Bernard Shaw, 1856-1950) の『分からぬ

ものですよ』( *You Never Can Tell*, 1896)の上演告知が掲載され、その下に次のような告知がある。

TO-MORROW, THURSDAY,

for the first time in Japan.

OSCAR WILDE'S

“The Importance of being Earnest,”<sup>(4)</sup>

上演の内容については調査不足のため詳細はわからない。明治43年(1910)11月の『新思潮』(第3号)の「REAL CONVERSATION」には和辻哲郎(1889-1960)、木村荘太(1889-1950)、谷崎潤一郎の3人の会話が脚本調に記載されている。時は10月18日夜とある。

和辻。ああ、昨夜も君は横濱へ泊ったのかい。大分どうも御熱心だね。<sup>(5)</sup>

ここからわかることや、横浜に連泊して芝居を観に行き、そのあとの会話のところで「ゲイティ座」<sup>(6)</sup>の名前が出てくる。

木村。(手に取って見る、谷崎も覗き込む) メエジョアス、コメディ、コムパニイのミス、ジョオジイ、コルラスか。昨夜は何を演ったんだ。

和辻。オオルド、ハイデルベルヒ。<sup>(7)</sup>

ここからわかることは「メエジョアス、コメディ、コムパニイ」が Major's Comedy Company であり、ここで取り上げているのは Warwick Major's Comedy Company のことである。「ミス、ジョオジイ、コルラス」は Miss Georgie Corlass、「オオルド、ハイデルベルヒ」は *Old Heidelberg* のことである。上演は10月17日であった。なお、*Old Heidelberg* は英訳のため、原題は *Alt Heidelberg* のことだ。『アルト・ハイデルベルク』はドイツの作家・

ヴィルヘルム・マイヤー＝フェルスターによる 5 幕の戯曲である。この戯曲は後年、文芸協会、築地小劇場、宝塚少女歌劇団でも上演されている。

木村。とにかく何だよ。こないだ吉井君は、ゼ、イムポオタンス、オブ、ビイイング、アアネストを見にゆく積りで朝それを讀んどいて家を出た處が、東京まで出て来ると何處かへ引つかかつて呑んでる中に忘れちやつてつていふが、面白いぢやないか。<sup>(8)</sup>

ここからわかることは「ゼ、イムポオタンス、オブ、ビイイング、アアネスト」が *The Important of being Earnest* であることだ。会話の中で「四晩も続けて通った」<sup>(9)</sup>とあり、少なくとも、10月17日前後の4日間のうちに *The Important of being Earnest* が上演されたことになろう。記録によれば10月13日に上演された。上演の内容についてはの詳細はわからない。今後は明治の文豪の文章や日本国内発行の英字新聞、外国新聞等の調査を継続的に行っていきたい。

## 注

- (1) 升本匡彦『横浜ゲーテ座 一明治・大正の西洋劇場』（岩崎博物館出版局、1986年6月第2版）、p.67.
- (2) Ibid., p.2.
- (3) Ibid., p.199.
- (4) Ibid., p.179.
- (5) 「REAL CONVERSATION」(『新思潮』第3号、新思潮社、1910年11月)、p.67.
- (6) Ibid., p.68.
- (7) Ibid., p.67.
- (8) Ibid., p.68.

(9) Ibid., p.67.